奥浦混声合唱団発表会合同演奏（12月12日）

島のひかり ホームページアドレス
http://lifeaidgoto.jpn.cx/simanohikari/

島のひかり

発　行
カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL 0959(73)0072
印　刷・㈲才津印刷所

生きること―成長と老い―

主任司祭　眞浦　健吾

初めに、神は天地を創造された。

「光あれ。」こうして光があった。――

夕べがあり朝があった。第一の日である。

創世記の最初の箇所です。父である神が、天地を造った時から、時間というものも存在し始めています。この時間の中に、六日目に私たち人間も造られました。夕べが来て、眠りについて、朝を迎える。この時間を生きているわけです。

この時間を生きている証しとして、そこに「成長している」という何かが含まれていなければならないのかもしれません。昨日よりも今日、今日よりも明日、という様に、知的にも、精神的にも、肉体的にも。親たちは、自分たちの子供の成長を喜びます。そこにいろんな可能性や喜び、楽しみを持ちながら親として生き、親として成長しているのです。また、今までできなかったことができると、子供たちは次へ挑戦する勇気と力がわいてきます。人間として成長しているわけです。しかし、時間が経つにつれて、成長しているはずが、老いていることも事実なのです。出来ていたことが出来なくなる。見えている文字が見えなくなる。物をどこに置いたのか忘れてしまいます。肉体的にも、頭の能力的にも「こんなはずじゃなかった」と言って、落ち込んでしまうこともあります。

今年、寅年生まれの年男です。先に書いたことが自分の身に起きてきました。朝、教会の祈りや聖書の文字が見えにくくなり、体を動かそうと思っても、若い頃のようにはいかないし、年齢を感じます。でも、そう言ってばかりではいけません。今の自分に合ったもの、方法を見つけて生きていくことが大切だと思っています。神様からはいつも、たくさんのお恵みを頂いているので、その恵みに感謝し、また力に代えて、この一年をがんばりますので、よろしくお願いします。

新年を迎えて

評議会議長　竹山要司

謹んで主の御降誕と、新年のお慶びを申し上げます。

過ぎし昨年、浦頭小教区役員新体制となり、内容を把握仕切れないまま九ヵ月が流れていったような気がします。

しかし小教区信徒の皆様、役員の皆様の多大な御協力を得てひとつずつ消化することが出来ました。

又、眞浦神父様の寛大な心で随分助けられました。感謝致します。こんな時、ふと、故 島本要大司教様の名言を思い出します。「大工は、大工しながら大工になっていく」「信者は、信者しながら信者になっていく」この言葉の意味を、今になって実感しています。私も微力ながら「議長になれる様に」と、思っています。

今年も次々と様々な行事などが控えていますが、一つずつ着実に小教区発展のために寄与できればと思っています。

どうぞこの一年、教会のおしえに従い、希望に満ちた実り多き年でありますようにお祈り致します。

福江教会百周年公演

カトリック福江教会創立百周年（五年後）記念公演が、十二月十三日、九時三〇分から十一時三〇分まで、福江教会に於いて公演が行なわれた。

約二〇〇名の参加であった。開演に当って、福江修道院シスター方による「聖霊来て下さい」のコーラスに始まり、講師として、長崎二十六聖人記念館々長レンゾ・デ・ルカ師をお招きして、アルメイダ及びロレンソ時代のキリスト教布教が、どのようにして五島に広まったか、その歴史を詳細に話して下さいました。その当時、五島で洗礼を受けた者は三千人とも言われる。公演の最後に質疑応答があり三名の方が質問された。

最後に、福江教会宮崎議長さんがお礼の言葉を述べた。その中で「キリシタン時代の人達は未知の宗教にもかかわらず、キリスト信者となり、迫害にも耐える強い信仰を持っていたのは、よほど宣教師達の説教が上手だったのかな（笑）、今の私達にどれだけ強い信仰を持っている者がいるだろうか。私達の信仰を見つめ直すいい機会」だと。

今回は第一回と言う事で、来年も予定されているようです。

○結婚おめでとう

二〇〇九年十一月二十八日

才津　隆也　福江

マリア宮川木綿子　半泊

私たちの新たな決意　2010年

浦頭に住んで

赤尾　喜代美

早いもので、五島に帰って四月で六年になります。浦頭に住んで四年ですが、今でも良く知らない人も多いです。

いろんな人達に出会い言葉をかけていただき、地区の事、参加しなければいけない行事、教会の事など教えていただく事ばかりでした。人との出会いは自分の財産となり、大きな輪ともなる事を実感しています。仕事でも遊びでも、これからも人との出会いを大切にしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「トラ・トラ・トラ」

山本　優子

新年あけましておめでタイガー！（笑）

私はこれまで「年女だから」とか「今年こそ」といった年頭の抱負を語る機会などなかったため、今回の原稿依頼に困惑している次第です。今までは毎日の仕事及び子育てに追われ、自分のことを考える余裕が少し不足していたように思います。

私の新年にあたっての決意は子供達の成長を見守りながら楽しく過ごすとともに、今の生活環境の中で、自分自身を見つめ直すことです。日々精進し、挑戦する気持ちをいつまでも忘れることなく、決意を新たに「愛」のある充実した一年間を過ごしていきたいと思います。二〇一〇年は、新しいことにレッツ寅イ!?（苦笑）

※「寅年」とかけまして「愛」と解く、その心は、どちらも「う」の前です。（冷汗）

ワレ「なぞかけ」ニ成功セリ。

還暦が来たぞー生雄

鍋内　生雄

新年あけまして、おめでとうございます。五度目の年男、妻に万年青年と言われていたが最近では、いつまでも若いと思うな……目は霞み、耳は遠くなり、物忘れはひどくなる。一昨年には不覚にも右肩腱板断裂という怪我をした。手術、リハビリに半年も掛かり、職場にも多大な御迷惑をおかけした。年を取って良か事は何もなか。この様にガタが来るのが還暦だろうな、と実感している。同時に人生の折り返し点でもある。今まで何をして来たのだろう、かつて三途の川の向う岸まで行って引き戻され、それがトラウマとなり、人は何の為に生きるべきなのかと模索する青年期もあった。再び生かされ、与えられた人生を世のため、人のため、それが自分の成長につながるとの思い、情熱も、今では錆ついているなと反省する。還暦前の十数年を奥浦慈恵院でお世話になっている。子ども達と接する中で、ありがたい事に忍耐力がついた。どうしようもなく悪餓鬼で、他人を受け入れなかった子に変化が見られ、「何でもいいから先生の弟子になりたい」と言いだした。やっとここまで来たか、と嬉しくなる。子どもは日々成長し大切な事を教えてくれる。神の似姿として造られた者として相応しく、妻と仲良く、平凡ながら自給自足に励み、祈る事の出来る夫婦を目標に、「良く頑張ったね」と神様に褒められるように成長したいと願っている。

奄美巡礼紀行

〝多くの出会いに感謝して〟

昨年11月7日より3泊4日の日程で、中村長八神父様ゆかりの奄美大島を眞浦神父様を団長に総勢15名で訪れました。旅の顛末をお届けします。

中村長八神父様が赴任された赤尾木教会は平地で海に面し、一キロ足らずのくびれた交通の要所に質素に建っていました。広場に百年は経つ大きなアコウの木があり、根をはり枝を広げ人の憩う立派な木でした。

奄美島民に二十六年間宣教。寺小屋建設など昼夜なく山坂越えて努め、使徒として更なるブラジルに向かったのだろう。

長八神父様の足跡を辿る四日間の旅は印象深く、アコウの木を思わせる大歓迎の毎日でした。心より感謝しています。

富上　進・静枝

奄美空港に着くと名瀬教会の小隈神父様をはじめ役員の方々の歓迎を受け、カトリック浦頭教会と書かれた大きな垂れ幕で迎えていただきました。

今回の訪問は、中村長八神父様の足跡をたどる事と奄美の教会巡りでした。

同じ価値観をもつ信者同志で、楽しい歓迎の夕食会でした。

山本　哲己

奄美空港にて聖心教会の出迎えを受ける

「再度訪れた奄美」

念願の奄美の旅へ出かけ、当地の皆様と親交を深めると同時に心からなるお持てなしを受け、ありがたく感謝しつつ帰りました。

小隈神父様に今はなき息子（孝信神父）のありし日の姿を重ね、止めどない涙にあふれましたが、得るものが多く感動の一言でした。天国にいる息子も、きっと喜んでいる事と思います。

奄美の信者の皆様と、泉シオ子様には本当に御世話になりました。

いつの日か奄美の皆様で、五島の地へぜひおいで下さる事を念願しております。

本当に御世話になり、心より感謝です。

赤尾　文子

「奄美大島巡礼に参加して」

中村長八神父様は、奄美大島で二十六年間修道者や信徒のため布教しました。神父様は偉大な人物だと思います。

聖心教会での親睦会で、御馳走でおもてなしを受けました。

奄美の人の心のあったかさと陽気さと、信仰の強さを感じました。

入口　義則

小隈神父様（奄美地区長）と奄美聖心教会の方々

「恩人との再会」

迎えに来て下さった小隈神父様のガイドで、直ぐ教会廻りをし、夕方より大勢の信者さんの歓迎を受け、五島から持ち込んだ魚も踊りました。

次の日は自由時間に小宿（こしゅく）の恩人の家へ。

小宿教会の婦人会長さんが宿まで迎えに来てくれて、小宿教会にも寄り、昼から父の恩人である岡山重彦さん御夫婦の墓参りや、重彦さんの長男光樹さんの病気見舞いが出来ました。

皆さんでホテルまで送ってくれて感動しました。

鍋内ツヤ子

右端より岡山光樹、鍋内キク、ツヤ子、サツ子、左端　岡山光博

鍋内義光・ツヤ子御両人の父・秀雄さんと兄弟・留春さんは、昭和三十年十月三日、貨物船日豊丸とともに五島灘で遭難し、八日間の漂流後、奄美大島小宿（こじゅく）の海岸に漂着。カトリック信徒の岡山重彦・サツ御夫婦や子息の光樹・光博氏の救助や介抱を受け健康を回復した。写真は、岡山サツさん帰天の折に、鍋内秀雄さんの妻キクさん、鍋内ツヤ子さんとその妹サツ子さんが弔問に訪れた時のもの。

――――――――――――

11月7日、朝の飛行機で福岡・鹿児島を経由して奄美に着き、空港での出迎えの後さっそく瀬留教会に立ち寄り、心からの歓迎と百周年を迎えた教会の説明を受けました。

夕方から、奄美聖心教会信徒大勢の方々の素晴らしい歓迎を受けました。

翌日、御ミサに与り信徒の方々への紹介を頂きました。

その後、中村長八神父様の布教活動の足跡をたどり、大熊教会・芦花部教会・嘉度教会・安木屋場教会・赤尾木教会・笠利教会とまわりました。

長八神父様の27年間の布教活動で、道路もない時代に海岸や山道を徒歩や馬で各集落をまわり、多い時には一日に三〇〇人もの方々に洗礼を授けたと聞きました。

この教会巡りのバスに付き添って頂いた信徒のガイド案内の素晴らしさに感動しました。

毎日の接待、最後の飛行機に乗るまでの見送りと奄美の教会のまとまり、信仰の強さに感銘を受けました。

「聞いて行う者となります様に」

鍋内　義光

長八神父様の教えは確実に大きく育っていました。

奄美の信徒の皆様と接した時に、私よりも強い信仰の心を感じました。

大きな喜びであり、目標にしたいと思います。

今回出会った方々に心から感謝・感謝。神様のお恵みが全ての人にありますように。

本村　義則

――――――――――――

聖母の騎士ＯＢの本村さんにとり、今回の旅は久方ぶりの奄美同窓生との再会になりました。

何処か五島に似たような海と山、しかし南の国特有の植物が見られ、道路沿いにはサキシマフヨウの白やピンクの花が真っ盛り、そんな奄美を三年ぶりに訪れた。

長八神父の足跡を訪ねた今回の巡礼、訪れた先々で我々が真似できない様な心からのおもてなし。

連日御案内頂いた聖心教会の役員さん、浦上教会の青堀さんや信徒の皆様、同じ信仰を持つ者の絆を深めた巡礼の旅でした。

鍋内　生雄

青堀律雄さん宅（右端後列）にて

長八神父様の足跡を辿って奄美巡礼に参加させて頂きました。教会が三十二あると知り驚きました。

歓迎会などおもてなし本当にありがとうございました。

鍋内　初恵

福岡・鹿児島での乗り継ぎを経て辿り着く奄美の島。

沖縄、佐渡島に次ぐ面積を誇るこの島（福江島の約2.2倍）は、鹿児島教区信徒の半数の信徒数を数え32の教会が点在する「祈りの島」です。

明治24年（1891）に始まった島の信仰の歴史に大きな足跡を残したのが、奄美のローマと呼ばれる笠利や大熊（だいくま）等の布教に尽くされた中村長八神父様でした。

父母から聞いた長八神父様の宣教の姿を、懐かしげに物語る古老の方とも御会いしました。

何よりも感動したのは、私達巡礼者を手作りの料理や特訓を重ねたコーラスで迎えてくれた「もてなしの心」と、昭和9年の宣教師島外追放という弾圧の嵐を乗り越えた力強い信仰の力でした。祈りと愛の心の原点を教えて頂いた貴重な旅に感謝致します。

木口　利光

真浦家再会
（右前列・真浦礼子、後列・Sr真浦）

巡礼に参加出来た事を感謝し、初めて降り立つ奄美空港の大地は心地よく暖かく迎えて頂きました。案内して下さった小隈神父様はじめ、役員の皆様のお陰で「中村長八神父様」のルーツを辿る事ができ意義深い巡礼でした。御心教会信徒のみなさん、青堀家の心暖まるおもてなしに感謝し、目に見えない架け橋で「奄美」「五島」の絆を結んだ「長八神父様」に〝感謝〟。

赤尾　一美

楽しかったクリスマス会

恒例のクリスマス会、今年も十二月二十五日、二番ミサ後、神羊館にて催された。各々抽せん券を買って入場。ホール一杯となった。保育園児の「ぼくらは宇宙飛行士」と「アラビアの舞姫」で演技開始。とても園児とは思われないすばらしい舞に拍手喝采。続いて小学生の出し物、シメオン会の「カタツムリ伝四郎」婦人部会の「ヤッターマン」小教区外からも特別出演があり、最後はお楽しみ抽せん会で大いに盛り上がった。

おたより

十 主の平和

寒さも一日一日身にしみる候となりました。お仕事のかたわら皆様には大変だろうといつも思っております。

長崎市　**Sr赤尾スミエ**

浦頭教会や他の宮原教会等の活動、典礼ニュースに嬉しく故郷を想いながら島のひかりを読んでおります。

兵庫県　**犬山　勇**

いつも温かい便りをありがとうございます。

宮崎県　**Sr浦　夏美**

ありがとう

長崎市　古川神父様
福江　大田秀隆様
長崎市　Sr赤尾スミエ様
福江　福江修道院様
長崎市　浦　宗一様
兵庫県　犬山　勇様
佐世保　松田トミ子様
長崎市　佐々野美井子様

島田喜蔵神父ものがたり（Ⅲ）

長崎ウエスレヤン大学講師（非常勤）
加藤久雄

島田喜蔵少年は、奥浦から上五島に帰り、すぐに長崎へ渡った。長崎では、浦上辻の高木仙右衛門（浦上キリシタンのリーダー）宅に住み込み神学生を目指し準備をはじめた。この仙右衛門宅は秘密聖堂になっており、大浦から神父が忍んできてひそかにミサをあげていたところであった。その秘密聖堂が発覚し、高木仙右衛門は捕らえられ、この仮聖堂は焼き払われた。喜蔵少年と有安少年（後の有安秀之進神父）は捕手から逃れた。喜蔵少年の念願がかない、一八六七年の後半に大浦天主堂に呼ばれ神学生となった。島田神父は、大浦天主堂司祭館の天井裏にある「無原罪の間」で数名の神学生と勉強を始めた。一八六八年七月から浦上キリシタンの大検挙がはじまり、総流罪となった。この事件は、一般には「浦上四番崩れ」、信徒は「旅」という。そのころ大浦天主堂の内外に監視が厳しくなり、潜伏する神学生を分散し、各地に避難させることになった。一八六九（明治二）年ごろ、喜蔵少年ら四人の神学生は最初の避難組として、深夜ひそかに久賀島の信徒の帆船に乗り、翌々日に久賀島に到着し、日が暮れるのを待って島に上陸した。喜蔵少年らは、野園集落のさらに南にある杉尾（スギョウ）にある浜村繁造というキリシタンの古老の家に潜伏した。喜蔵少年ら神学生は、「五島崩れ」で最も過酷なキリシタン弾圧があった牢屋の窄事件の直後の久賀島に避難したのであった。

大浦天主堂

奥浦のキリスト教遺産群（Ⅱ）

大泊の聖堂および子部屋跡

長崎ウエスレヤン大学講師（非常勤）
加藤久雄

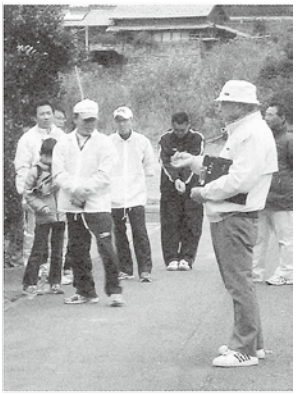
下五島の潜伏キリシタンへの再布教と信徒の司牧を任されたパリ外国宣教会のマルマン神父は、一八七九年十月に大泊に聖堂を建設した。下五島における信徒復活後の最初期の聖堂の一つである。同時期の教会堂は、玉之浦町の立谷教会堂、一年遅れて堂崎旧教会堂、三井楽町の岳旧教会堂、岐宿町の旧水ノ浦教会堂がある。しかしながら、いずれも当時の建築物は現存していない。現存するこの時期の建築物は、久賀島の国指定重要文化財の旧五輪教会堂および上五島中通島の町指定文化財の江袋教会堂があるのみである。翌年の一八八〇年十月十七日には大泊の聖堂の隣接地に子部屋が建てられる。大泊には、聖堂と子部屋という復活期のカトリックの再布教およびその慈善事業の複合的施設が、下五島においてはじめて設けられたのである。後に、その機能は堂崎が担うことになるが、この地には、復活期の下五島で最初にカトリックの崇高な教えと復活した信徒の情熱を具現化したという、大切な歴史が刻まれている。一九〇三年頃に聖堂は改築され、一九六九年には老朽化と浦頭新教会堂が献堂されたのを機に廃堂とされ解体された。現在、その地は、大泊と周辺地区の信徒の教会墓地となっているが、当時の石垣のみが残存している。この『史跡』、いわゆるこの地とここに刻まれる歴史は、いつまでも大切にして欲しい五島キリシタンの誇るべき近代文化遺産である。

現在の大泊の聖堂および子部屋跡に残る石垣

ふるさとだより

五島一、日本一をさるく

今回で第三回目となる「奥浦さるく」が十二月六日に行われた。小学四年生から中学生、一般の約百名の参加があった。五島で最初の浜泊教会跡（他の説もあるらしい）、日本一を誇る樫の浦あこうの樹、大泊の教会跡、日本で初めての施設慈恵院跡を訪れ、先人達の力強い愛と信仰の深さを学んだ。樫の浦公民館では、マグロ養殖の話を聞き、一日の餌代が百二十万円であることに驚いた。その後、町内会連合会会長のご厚意でぜんざいをいただき、心と体を温めることができた。



奥浦海鮮直売所 12月19日オープン

平成17年度に創設された離島漁業支援再生交付金制度に基づき、奥浦地区漁業者128名で漁業集落を立ち上げ、漁業者の所得向上に向け、これまで、カサゴ、クエ、ヒラメ放流など行い、平成19年度には戸岐湾での筏釣事業に着手し、五島で初めて漁師の「父ちゃんが釣った魚を母ちゃんが売る直売所」造りと、インターネットを使って、「五島の美味しい魚を全国の食卓に届ける」通販など、話し合いを重ね、開店の運びとなりました。

奥浦海鮮直売所

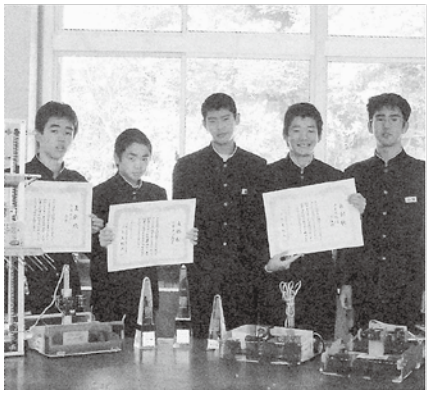
場　所　漁協奥浦支所前
時　間　10：30～16：00
（毎週土曜・日曜開店）
鮮魚販売：奥浦養殖まぐろ・くろたい・やず他
かき・さざえ・伊勢えびのバーベキュー
加工品販売：水イカ・きびなの一夜干し

ロボコン大好き！ 九州大会を終えて

平山　末義

緊張感あふれる会場。子ども達以上に緊張している私。それも、授業部門での奥中の失敗した試合を見ているからだ。また、テレビ局の追跡取材のせいかもしれない。

応用部門の初戦、親の緊張を尻目に、冷静な子ども達。21秒を残してのパーフェクトゲーム。その後も順調に勝ち進み、いよいよ決勝戦。崎山が予選敗退してしまったため、是非とも優勝したい試合だ。



コートの周りを人が囲む。手を合わせる気持ちで試合を見守る。ゲームスタート。冷静なコントロールと的確な補助者の指示で、確実にピンポン球を置いていく。最後は決め手の新兵器が炸裂。相手にボールを取らせない方法で、優勝を獲得した。

全国大会に出場できたのも、指導して頂いた先生、多くの皆様方の応援のおかげだと深く感謝致している。子どもには大きなプレッシャーではあるが、全国大会三連覇を成し遂げてもらいたい。

※応用部門では平山貴志君、授業内部門では川口祐樹君が、1／23・24の全国大会に出場します。

編集後記

去年、初めて編集長として大役を受け、どうにか一年の航海を終えましたが、ふり返るに竹山元編集長を始め、多くの方々の影の日向の援助の力を強く感じた一年でした。〝感謝〟

木口　重憲